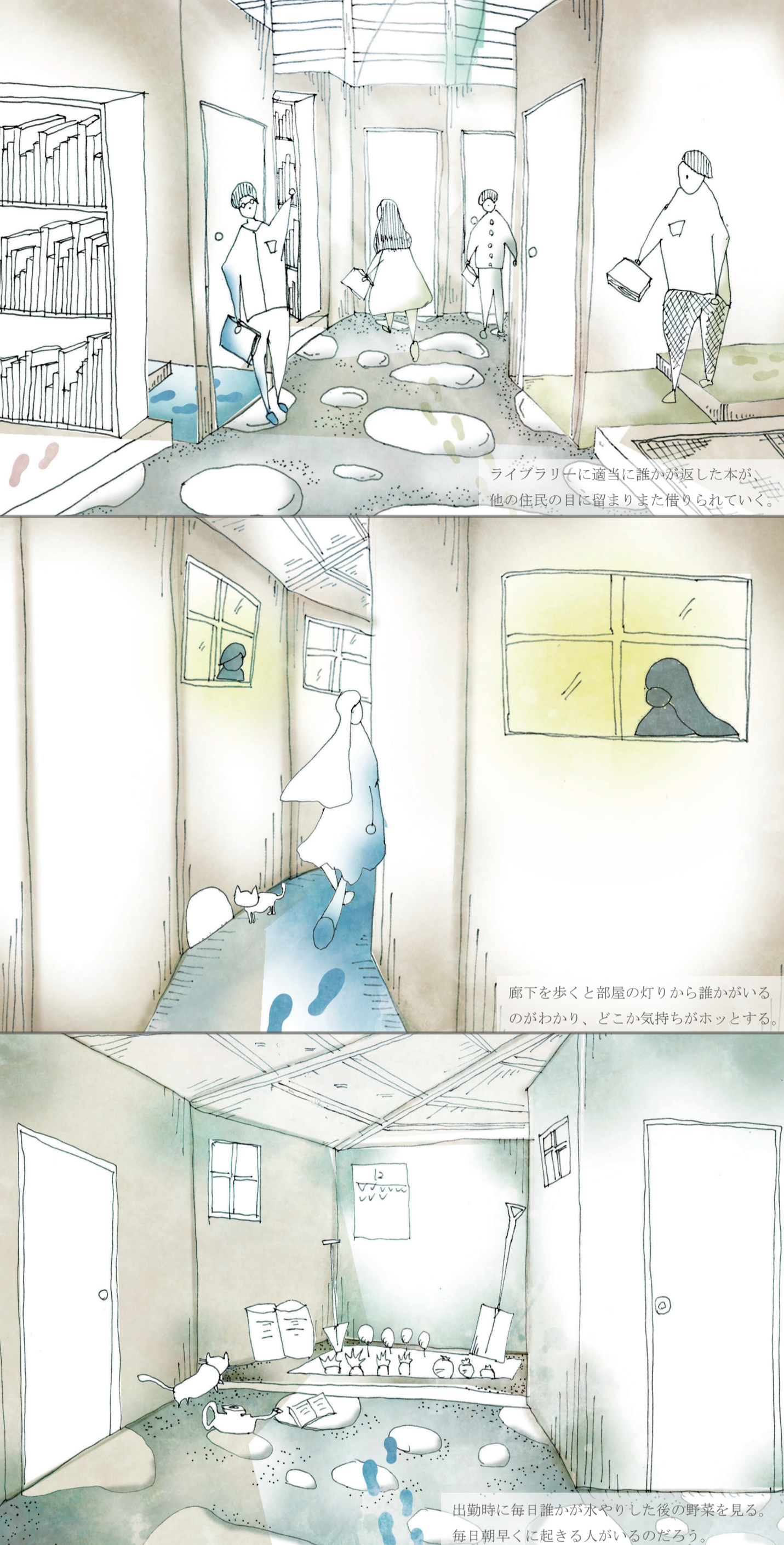
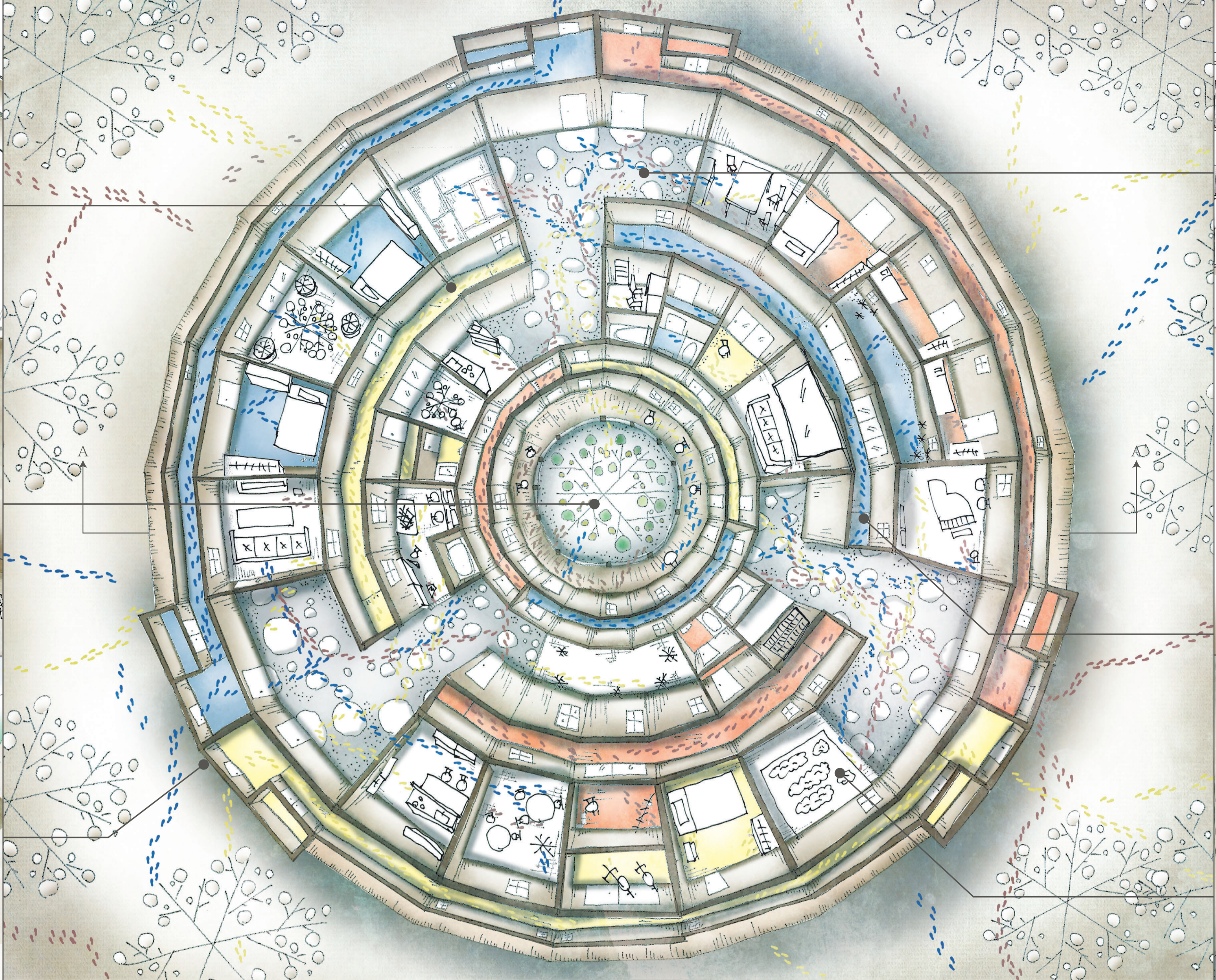


個人廊下と共用部屋が交互に広がる構成。共有庭の植物の成長が毎日の話題に。

中心の庭のシンボルツリーの元で住民たちが思い思いの時間の過ごし方をする。

円状に広がるこの家の中はレイヤー状に壁が構成されている。



ライブラリに適当に誰かが返した本が他の住民の目に留まりまた借りられていく。

廊下を歩くと部屋の灯りから誰がいるのかわかり、どこか気持ちがホットとする。

出勤時に毎日誰かが水やりした後の野菜を見る。毎日朝早くに起きる人がいるのだろう。

誰かの足跡から知る暮らし

「触れない家」に誰かが残した痕跡を発見することから始まるコミュニケーションの方法を提案する。

昨今のパンデミックにより人と人の直接的な交流の仕方が再考されるようになった。従来の交流方法が否定される中で、個人への意識が強まったように感じる。

小さな「マチ」が広がる大きな「イエ」を

1つの大きなイエの中に個人廊下と共用部屋という概念を設けることで、マチに住むような行動への匿名性のある暮らしと、ふとした時に誰かの生活の痕跡を見つけ温かみを感じる間接的な人との交流を実現した。

痕跡を残すことを許容して、話の種になるような無理矢理に交流を押しつけることのない集合住宅

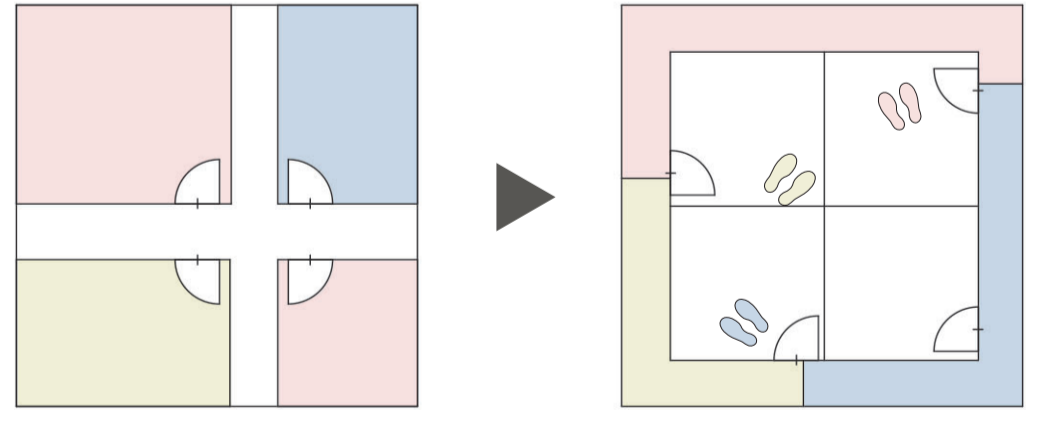
01 『痕跡』を媒介とした非接触型の交流



▲ 日常に潜む行動の痕跡=『足跡』

この「触れない家」では直接に人との交流を促すのではなく、誰かの行動の痕跡=『足跡』に気付くことによって仕切られながらもお互いに知覚する暮らしを提案する。まるで街の中を歩いていて小さな発見が得られるときの様な新しい交流のカタチ。大きなイエの中に小さなマチをつくり、その中で空間やモノをシェアすることで生まれる近過ぎず遠過ぎない距離感を設計した。

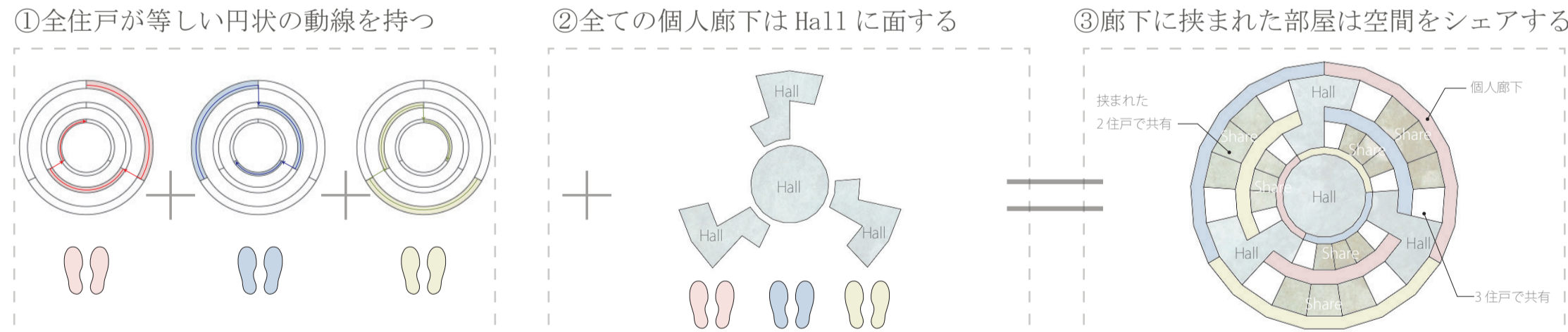
02 個人廊下と共用部屋



従来：共用廊下と個人部屋 提案：個人廊下と共用部屋

従来の集合住宅は共用の廊下で動線として設けられ、個人の部屋へと繋がっている。この図式を反転し、個人のための動線としての廊下と共用の部屋を考える。これにより移動に匿名性が現れ「触れなく」なり、ふとした痕跡を意識する暮らしに変化する。

03 交わらない『個人廊下』のルールから導く平面構成



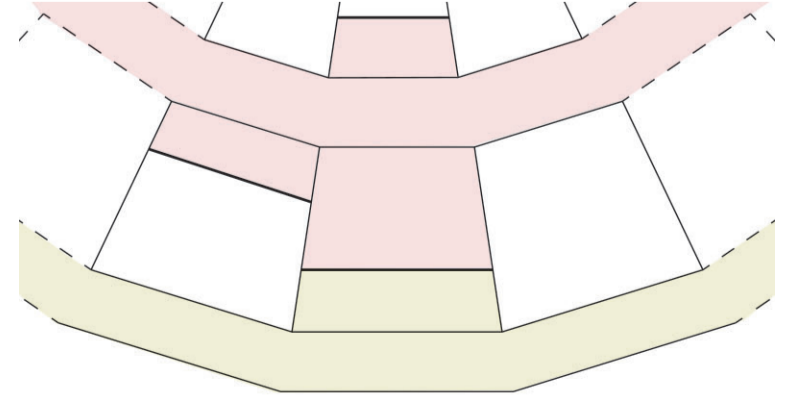
① 全住戸が等しい円状の動線を持つ ② 全ての個人廊下はHallに面する ③ 廊下に挟まれた部屋は空間をシェアする

大中小それぞれの円を3等分し、ずらしながら繋ぎ合わせることで、全住戸が等しい距離の円状の個人廊下を所有する。

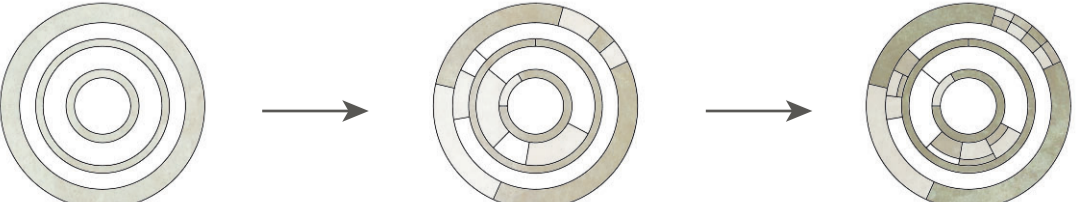
Hallはどの住戸の住人も立ち入り可能であり、共有部屋への動線となっている。外部空間のようなマテリアルを用い、内と外の境界を明示する。

Hallから立ち入れず、2住戸の個人廊下のみに挟まれた部屋は半割したり互いに譲ったりして空間をシェアしながら使っていく。

04 家族構成の変化に対応する可変的な間取り

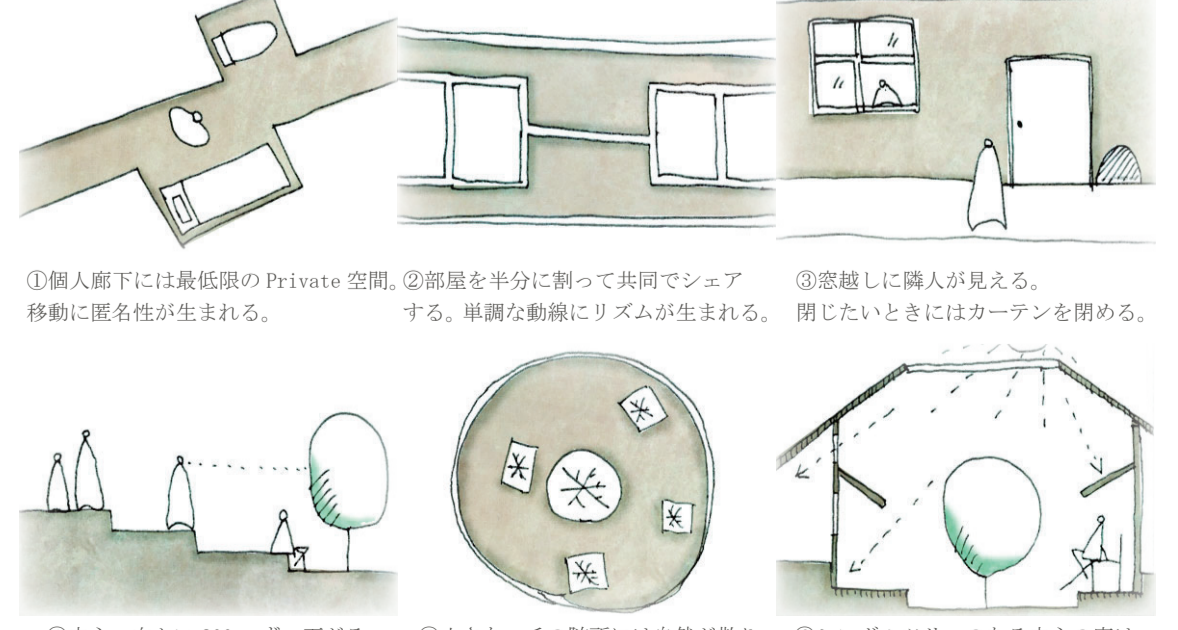


DIY 部屋で加工した木材パネル壁を適宜付け変えることによってこの家は自由の間取りを変更できる。家族構成の変化や転出・入居に対応して使い続けることができるため持続可能性が高い住宅である。



長く使う程パネルはエイジングし、間取りも複雑になる様は年輪に似ている。

05 適度に『触れない』距離の設計



① 個人廊下には最低限のPrivate空間。② 部屋を半分に分けて共同でシェアする。単調な動線にリズムが生まれる。③ 恋煩いに隣人が見える。閉じたいときはカーテンを閉める。

④ 中心へ向かい200mmずつ下がる。⑤ 小さなマチの隣所には自然が散りばめられていて距離感を調節する。⑥ シンボルツリーのある中心の庭はスリ鉢状の断面は求心力を持つ。⑦ 全住戸が同一集まる場となる。

06 A-A' 断面図 S=1/100

